

テート美術館展 光 ～ターナー、印象派から現代へ～

国立新美術館 23. 07. 12～10. 02 大阪中之島美術館 23. 10. 26～24. 01. 14



ジョセフ・マロード・ウイリアム・ターナー 《湖に沈む夕日》1840年頃 左
ジョン・ブレッド 《ドッセットシャーの崖から見る英国海峡》1871年 右
雲間からもれる光が海面の島を描き出し、キラキラと光る水面には細やかな波がリズムを刻み、小さな人と船影は風景がいかに広大かを知らせてくれる。



ウイリアム・ローゼンスタイン 《母と子》 1903年 左図
親子の何気ない日常生活を描いた作品は、2人の親密な関係を裏付けるために、とっても柔らかい「光」が用いられている。
ヴィルヘルム・ハンマースホイ 《室内》 1899年 右図
左図とは対照的に暗めの色づかいに統一して、淡い「光」を効果的に描くことで、室内の静けさや空気の冷たさなどの感覚を観賞する人に与えている。